

私は大学を受験したときは文系の学生であった。自分が卒業した高校は中高一貫校で大学受験に力を入れていたため高校1年生の終わりの頃という早い時期に文理を選択しなくてはいけなかった。その時は、将来のことは漠然と稼げるような人間になりたいとかしか考えていなくて、英語や社会科目が得意であったということだけで文系という選択をした。受験勉強が進み、数学や理科科目について理解が深まるにつれて理系に進めば良かったと思うようになっていった。こうして、東大の文科Ⅱ類に合格した自分は進学振分け制度を利用して理転しようと考えていた。そのころは好きな数学などを活かして工学部に進もうと考えていた。

ではどうして農学部に進もうという考えになったのかというと、自分はボーイスカウト活動を小学校のころから続けていて自然と触れ合うことが好きであるということと大学生活の中で再確認したからである。ボーイスカウトでは自分でキャンプを計画してテントで1週間山の中で過ごしたり、地図とコンパスだけでハイクをしたりすることがあり、都心部で生まれた割に自然とかなり密接にかかわってきた。このような本格的な活動は小学生から高校生のころまでしかやっておらず、大学に上がってからは地域社会への奉仕や宿泊施設をつかったキャンプが活動のほとんどであった。自然と触れ合う機会が少なくなってきたことで自分が自然が好きなのに気が付くことができた。そうして農学部の中でも緑地環境学に進むことにした。

自分には農地を除染したり農業指導をしたりなど、直接的に働きかけて農業再生を起こすことはできない。だが、自分は文系の視点をもって、まだ未熟であるが理系の視点も持ち合わせている。そして、なにより自然が好きである。被災地には耕作をあきらめて手放してしまっている土地やひとの手が加えられなくなった林野があるはずである。自分ができるのは、それらの自然を再び以前のような状態に戻して美しい自然の景観をつくりだすことである。だが、美しい景観ではそれで終わってしまう。自分が望むのはその自然と触れ合うことができる環境、つまりキャンプ場などをつくることである。キャンプ場といふとやがて自然を壊すように思われるが、そこにキャンプ場ができることでその自然は管理の対象になるであろうし、そこでの食材などを地元産のものを提供、販売すれば自然は保たれ、地元の農業は活性化するのだと考える。また、そこに小学生などの幼少期の子どもが来れば、自然教育ができ自分のように自然に親しみを持つひとが増え、被災地にとどまらず日本の自然環境に対してよい効果があるはずである。自分はこのように間接的であるが、農業のまわりの環境を変えることで被災地の農業再生を目指そうとおもう。